

「神の義」か「人間の理性」か (二)

—古い知の枠組は現代に通用するか—

長谷川 洋三

第五章

ヤハウエ神に顕著な排他性・独善性・高圧性・狷介性・報復意識などが、イエスにはみられない

イエスが「神への冒瀆は、どんなものでも赦される」といわれた時、ヤハウエ神を意識し、それを批判・否定する意図があったとしたら、ヤハウエ神はイエスが信奉される「父なる神」ではあり得ないことになる。その場合、キリスト教がイエスを「神のひとり子」と呼ぶときの「神」がどの神であるかを見直す必要が出てくる。

ところで、ユダヤ教とキリスト教とイスラムの三宗教の神は同一の天地創造神ということになっているが、ユダヤ教とイスラムは共に、イエスを「神のひとり子」とするキリスト教の発想を強く否定

してきている。イエスを聖者とみなすことは認めるが、神とすることは賛同できないという発想からである。イエスを神と認めないのは、彼等異教徒だけではない。キリスト教の一派であるユニテリアン教派も、イエスを「子なる神」とすることに反対する。イエスをあくまでも人間として見るので「三位一体」(トリニティ)をも否定し、「神の唯一性」(ユニティ)を主張している。

以上のことを考慮したとき、「神のひとり子」の「神」がヤハウエ神以外の神である可能性について考えてみることは、もはや不可欠である。筆者の結論から先に述べてみる。イエスの「神への冒瀆は、どんなものでも赦されるが、聖霊に対する冒瀆は赦されない」という言葉は、神と聖霊が全く別の存在であることを示している。そのことから、イエスが信奉しておられる「父なる神」は、「冒瀆してはならない聖霊」でありこそすれ、「冒瀆しても赦される神」

ではないという結論に達する。そしてヤハウエ神が「聖霊なる神」であるとする記述は『旧約』には一度も出てこないことから、イエスの信奉される「父なる神」（＝聖霊なる神）がヤハウエ神でないことも見えてくる。もし、イエスを「神のひとり子」と呼ぶ時の「神」や、イエスが「父なる神」といわれる時の「神」がヤハウエ神でないとするれば、イエスを「子なる神」と呼ぶことに對してユダヤ教徒やムスリムが反対する理由がなくなる。彼等の全く知らない神のひとり子であるとしたら、反対する根拠がないからである。筆者は、「ヨハネ伝」に出てくる「その名を信じる人々には神の子となる資格を与えた」（一・12）の「一神」や「父のひとり子としての栄光」（一・14）の「父」や「父のふところにいる独り子である神」の「父」などはヤハウエ神ではなく、「聖霊なる神」もしくは「聖霊なる言の神」^{ロウナス}であると考える。そのような神ならば、ユダヤ教やイスラムの神とは異なる神であるから、ユダヤ教徒やムスリムがイエスを「子なる神」と呼ぶことに反対する理由がなくなるのである。一方、ユニテリアン教派もまたイエスを「子なる神」と呼ぶことに反対してはきたが、それは「父なる神」を『旧約』の神であると考えたからであって、実は彼等自身「神はわれわれの内にある」という教義を持つのであるから、イエスのいわれる「父なる神」をヤハウエ神ではなく「聖霊なる神」と認識さえするなら、イエスを「聖霊なる神」とみなすことは可能であったはずであるし、「三位一体」をも肯定できたはずである。「神はわれわれの内にある」とするユニテリアン教派の発想は、誰でも「三位一体」になる可能性を内

蔵しているとする思考と矛盾するものではないからである。

「誰でも（三位一体）になる可能性を内蔵している」という解釈は筆者の解釈であって、従来のどのキリスト教教派でもいわれたことがないものであるが、これが荒唐無稽でなく、むしろイエスやパウロの真意である確率が高いことは次の文言から見えてこよう。

あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい。（マタイ伝五・48）

あなたがたの体は、神からいただいた聖霊が宿ってくださいる神殿であり、あなたがたはもはや自分自身のものではないのです。

（コリントの信徒への第一の手紙）六・19）

前者はイエスの言葉であり、後者はパウロの言葉である。当時の時点で「神のひとり子」といわれるほどの人物はイエスだけだったにせよ、人は誰でも「神の子」となる可能性をもつことは、先に引用済みの

その名を信じる人々には神の子となる資格を与えた。（ヨハネ伝一・12）

という文からも確証が得られる。

以上のことから、イエスのいわれる「父なる神」はヤハウエ神ではなく、ユダヤ教には全く見られない「聖霊なる言の神」^{ロウナス}であると

というのが筆者の解釈である。キリスト教が『旧約』と訣別し、ユダヤ系一神教の神とは異なる神を信奉しているという立場に立ちさえすれば、従来ユダヤ教やイスラムからなされてきた批判は全て通用しなくなるし、従来のキリスト教が『旧約』の戒律を何一つ遵守してこなかった矛盾も解消する。

ところで、カトリックが信奉してきた神は、前回引用した『第二バチカン公会議公文書全集』でみたように、ユダヤ教の神であったはずなのだが、いつの間にかやら変質してしまっている気配があることを検証してみよう。

カトリック教会が二千年間において、いくつもの大きな誤ちを犯してきたことを、ローマ法王ヨハネ・パウロ二世は二〇〇〇年三月十二日に初めて正式に認め、許しを求める特別ミサをバチカンのサンピエトロ寺院で開いている(朝日新聞二〇〇〇年三月十三日夕刊二面記載)。十字軍・異端審問・反ユダヤ主義などをめぐって教会や信者が深くかかわったことを指摘したうえで、神に「謙虚に告白している信徒の悔い改めを受け入れ、慈悲を与えてくださるよう」求めたと報道されている。法王の懺悔は、「人間の理性」からみれば適正である。だからこそ、その懺悔に反対した「人間」は一人もいなかったのである。では、二千年間カトリックが見せてきた排他性・独善性・高圧性などはどこから生じていたのか。それは『旧約』のヤハウエ神の心の反映であるといえる。十四・五世紀において西洋では、教皇ヨハネ二世および教皇インノケンティウス八世の公布を受けて、大量の魔女狩りが行われたのは、ヤハウエ神の

女呪術師を生かしておいてはならない。(「出エジプト記」二二・17)

の姿勢を反映していると思われる。また十一世紀末から十三世紀末に至る計七回(八回という説もある)のイスラム攻撃のための十字軍遠征は、ヤハウエ神の

わたしをおいてほかに神があつてはならない。(「出エジプト記」二〇・3)

の姿勢を反映した排他性に基づいた勢力拡張のためであったと見ることもできる。もしそれらのカトリックの行動がヤハウエ神の心の反映であるとしたら、カトリックは過去の行動を謝罪する必要があることになる。信奉する神の心を映した行動であつて、神の心に適うはずであるからである。謝罪するということは、神の心が誤っていたことを認めることにもなるからである。にもかかわらず謝罪したということは、カトリックの神がいつの間にかヤハウエ神ではなくなっていることを露呈している。そして実はキリスト教では、「神」や「父なる神」という言葉を用いることはあつても「ヤハウエ神」という言葉を用いることはないし、イエスが用いられた例もない。そして『新約』の場合、『旧約』にたびたびみられる「報復」の教えはない。逆に「報復の禁止」がマタイ伝五章38―42節で述べられてさえいる。その点でもキリスト教は、ユダヤ教やイスラムとは正反対で、むしろ仏教と近似である。またヤハウエ神の

排他性・独善性・高圧性・狷介性はイエスには全くなく、むしろ逆である。しかもイエスには、ヤハウエ神を批判・否定しているとか思えない行動が多数あるのであるから、イエスのいわれる「父なる神」はユダヤ教の神とは異なるという前提に立って、イエスの真意に適う神学を構築することはもはや不可欠であろう。

『旧約』の神は「主なる神」といわれる。被造物といわれる人間は「従」であり、「主」と「従」の間には一線が割かれていて、両者は一つになることは不可能である。一方、イエスは「父なる神」を信奉され、イエスも民衆も「子」とされている。「父」と「子」は元をただせば一つであり、「子」は迷いからさめたとき「父」の元にふたたび帰っていきけるのである。この「父」は、「聖霊なるロゴスの神」ということができる。「三位一体」とは「父なる神」と「キリストなる神」と「聖霊なる神」の三つのペルソナが一体になつてゐることを意味するが、イエスは「父」と完全一体となつたペルソナであつたことから「三位一体」となつてゐるといわれているわけである。だが、全ての人間がロゴスの具現化であり、かつパウロの「あなたがたの体は、神からいただいた聖霊が宿つてくださる神殿である」が示すように、聖霊が内在する存在であるとしたら、誰であろうと機さえ熟するなら「三位一体」となる可能性を秘めてゐると考えることができる。それをイエスは「あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい」と言われたのだと筆者は捉える。ユニテリアン教派の「神はわれわれの内にある」という教義は、我々人間にとって「三位一体」が可

能であることを、彼等の意図の如何にかかわらず示している。『旧約』の「主なる神」とは違って、「聖霊なるロゴスの神」は全ての人間の「大我」と等しく、全ての人間と「三位一体」になり得る神であればこそ、それを冒瀆することは赦されないとイエスが言われたとみるべきであろう。我々と一つになれる神であればこそ、「主なる神」ではなく「父なる神」なのである。

右の解釈は、従来の西欧型神学からでは得られず、仏教を主とした東洋哲学の導入によって得られることから、「東洋型神学」と名付けた次第である。『旧約』を第二聖典として尊ぶにしては、あまりにも多い『旧約』との矛盾がキリスト教にはあるし、二十一世紀を前にして法王みずからが世界に謝罪しなければならなかつたほどに大きな罪をいくつもカトリックが犯してきたのは、イエスの真意とは百八十度異なる神学の上に立っていたからではないのか。カトリシズムは、人間の原罪はイエスの贖罪によって解消されたとしてきたが、実は人間は「聖霊なるロゴス」と根源を一にしているため、「救済」とはその根源に目覚めてそこへ帰ることで得られると考えるべきではないのか。それは、仏教の密教で一切衆生が仏性を持ち、その身そのまま六大法身であると考え、即身成仏可能とする発想と同根ではないのか。

第六章 『旧約』の律法は、神が与えたものか、人が作ったものなのか

『旧約』の律法が神によって与えられたものなのか、人によって作られたものなのかという問いは、ユダヤ教徒にとって快いものではないだろう。だが同種の問いはイスラエル人の中からも始まっているし、そもそもこの問いなくしては、キリスト教の戒律を語ることはできない。そこで出発点として、イスラエル人の発言を紹介してみよう。信仰を抜きにした学問上の話である。

テルアビブ大学のゼエブ・ヘルツオグ考古学教授がイスラエル紙ハ・レツに掲載した論文によれば、七〇年間にわたって続けられた発掘・検証の結果、『旧約』に書かれている記事のほとんどが史実でないことを、考古学者や歴史学者の大半が結論づけているし、唯一神という一神教の概念も今から二千年あまり昔に生まれたものにはすぎないという。一部を引用してみよう。

イスラエルの考古学は六〇―七〇年代、旧約聖書の記述の裏付けに夢中になった。しかし科学的な研究、調査を続けてきた人々の大半は、ユダヤ民族の成立過程は聖書に描かれたのとは全く異なる、という考えで一致。聖書の記述が事実であることを証明しようとしてきた研究者も、多くが、これに同意するようになったという。

例えば、モーゼがユダヤ人を率いてエジプトを出国し、砂漠をさまよったとする「出エジプト記」。どんな記録にも、古代エジプトにユダヤ人が集団で住み、脱出したことを示すものはなく、大半の歴史家は、脱出が実際にあったとしても数家族の小さなもので、宗教上の必要から拡大されたとみている。

また、古代イスラエル王国の版図はダビデ、ソロモンの栄華の時代に、現在のヨルダン、シリアの一部まで広がったという記述も否定される。せいぜいエルサレムと、西岸南部のヘブロンを中心とする狭い範囲を治めたにすぎないのではないか、というのが、考古学的検証の結論らしい。(中略)

宗教指導者らは、旧約聖書の内容を否定する説はこれまでも多く出ているとして、無視する構えだ。しかし、聖書に出てくる地名を盾に「ここはユダヤ人の土地だ」と入植を正当化する人々の根拠を揺るがすのは確か。また、ユダヤ教の戒律厳守の押しつけに反発するイスラエル市民が増えており、学問的に聖書の世界を否定する説は、聖書を背にした権威に反論する有力な根拠となりそうだ。(朝日新聞一九九九年十月三十日夕刊二面)

『旧約』における、考古学の対象となる面のほとんどが史実でないことは、戒律が神によって与えられたことを直ちに否定する材料になるわけではない。しかし、「出エジプト記」であれ、古代イスラエル王国の版図であれ、極端に誇張された記述であるのが事実であるとすれば、戒律が神によって与えられたという記述もまた「宗

教上の必要からの創作」である可能性が出てくる。ここで登場するのは、信者と学者の対立という問題である。「宗教指導者らは、旧約聖書の内容を否定する説はこれまでも多く出ているとして、無視する構え」であると報道されているし、信者も同様であろう。もし、信仰心から生じるその思い込みが、いかなる磨擦をも生まないならば問題はなにかもしれない。小説をフィクションであると知りながら読んで、そこから精神の慰藉を得ることになら問題がないことと同様である。しかし『旧約』の場合は、領土権をめぐり「カナンの地は神からの授かりもの」という論理が今なお周辺諸国との間に磨擦を生み、一方「戒律厳守の押しつけ」がイスラエル人自身に反感感をひきおこしているという事実がある。もし『旧約』の記述のほとんどが史実でなく、「神の言葉」もフィクションであるとしたら、他国の国益や自国民の人権を侵していることになる。信仰や宗教のほとんどは誇張された側面をもつ。その教義が他の共同体との間に磨擦を生まず、自国民の人権を抑圧せずに、自らの理想目標を追求達成できるものなら問題はないが、現代は国際社会・宗社会である。誇張や歪曲が他の共同体の国益や人権を侵す場合は多々ある。ここでこそ、すべての信仰や宗教の指導者が教義の錯誤を見直されなければならない理由がある。イスラエルの考古学者や歴史学者の証言は、フィクションを史実と錯覚し「神の命令」という大義名分のもとで排他的行動に奔る信仰者への警鐘となろう。国家による「宗教の自由の保証」はありがたいが、見境のない教義がはびこっては困ることも事実である。信教が迷信・妄信・邪信で

はなく正信であるためには、フィクションをフィクションと見抜く智慧の目まなこが必要であるが、それこそ二十一世紀に最も望まれるものであり、その必要性を端的に示したのが、二十一世紀の初年に発生したタリバンやアルカイダによる事件であったのである。アインシュタインが「宗教のない科学はびっこであり、科学のない宗教はめくらである。」と言ったのは、智慧の目まなこのない信仰は迷信・妄信・邪信ではあっても、正信の宗教ではあり得ないということの意味している。

* アインシュタインの言葉に出てくる「びっこ」や「めくら」は、身体障害への差別用語ではなく、誰にでもある「不完全さ」を示す喩えの用語と受けとめるべきであるし、筆者はそうのように解釈して用いている。

では次に、「神による律法」といわれてきたものが、実は神によるものではないかもしれないことを示す資料を検証してみよう。ヨハネ伝にはイエスの言葉として次の文がある。

あなたがたも聞いておるとおり、「目には目を、歯には歯を」と命じられている。しかし、わたしは言うておく。悪人に手向かってはならない。だれかがあなたの右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい。(マタイ伝五・38―39)

右の「目には目を、歯には歯を」は、『旧約』「レビ記」の次の文を受けていることは衆知である。

人に傷害を加えた者は、それと同一の傷害を受けねばならない。

骨折には骨折を、目には目を、齒には齒をもって人に与えたと同じ傷害を受けねばならない。(中略) わたしはあなたたちの神、主である。(「レビ記」二四・19) 22)

『旧約』では、この文言は神の言葉であると明記されている。だがイエスは、『旧約』の神の文言を引用しつつも、それが神の言葉であるとは言わず、「あなたがたも聞いているとおり」というふうになり、あたかも重視するに値しない風説であるかのような扱いをし、そのあげく「しかし、わたしは言っておく。悪人に手向かつてはならない」と、『旧約』の文言を否定する「報復禁止」の発言をしておられるのである。

では一体、『旧約』の神の言葉は本当に神の言葉なのか、それとも人間の言葉が宗教上の理由から「神の言葉」とされてしまっただけなのか。実は『旧約』の先の言葉は、『旧約』よりも古い時代に編さんされたバビロンのハンムラビ「法典」の中の戒律とほとんど同一であることが知られている。バビロンの王ハンムラビ(前一九二一―一七五〇)は、バビロニアを統一したばかりではなく、メソポタミア北部の一部を含む一大王国を築きあげ、その後「法典」を編さんしたといわれるのだが、その条文の中に次のものがある。

196項 もしアヴィールムがアヴィールム仲間の目を損ったなら、彼らは彼の目を損わなければならない。

197項 もし彼がアヴィールム仲間の骨を折ったなら、彼らは彼の

骨を折らなければならない。

200項 もしアヴィールムが彼と対等のアヴィールムの齒を折ったなら、彼らは彼の齒を折らなければならない。

(中田一郎著『ハンムラビ「法典」』五六―五七頁、

アヴィールムは「男」や「人」の意)

右の三つの条文は、先に引用した『旧約』「レビ記」の「骨折には骨折を、目には目を、齒には齒をもって人に与えたと同じ傷害を受けねばならない。」と、順序こそ、やや異なるが主旨は同一である。同害復讐(もしくは同害傷害)を受けなければならないという「判決」である。ハンムラビ「法典」の編さんは、強者が弱者を損うことがないよう、身寄りのない女兒や寡婦に正義を回復させるよう、虐げられた者に正義を回復させるよう、などの願いを法典化するためであったといわれる。『旧約』の神がイスラエル人に与えた戒律と同じものを、それより早くバビロンの王は作っていたこととなる。ハンムラビ「法典」と『旧約』の律法の類以点はその他に多数あることが研究者によって指摘されている(例えば中田一郎著「ハンムラビ「法典」」二〇〇―二〇一頁)。以上のことから『旧約』で神から授かったといわれる戒律は、実は神からの授かりものではなく、モーゼ等のカリスマ的指導者が同じセム語族に属するバビロン人の法典を知っていて、それを宗教上の理由から「神から授かった戒律」と銘うって『旧約』に記した確率が高い。アブラハムがイスラエル人の始祖とされ、従ってアブラハムの父親テラはイスラエル人扱いに

されてはいない。ではテラは何族の人か。バビロン人と同じメソポタミア（現在のイラク）の地にいたことから、バビロン人か、あるいはバビロン人と先祖を一にする民であった確率が高く、その場合テラもアブラハムもハンムラビ「法典」について知っていた確率が高くなる。

ところでイエスは「あなたがたも聞いておるとおり、（目には目を、歯には歯を）」と命じられている……」という言い方で、それが神の戒律ではなく、単なる風説であるかのような扱いをし、結局は「悪人に手向かつてはならない……」という言葉で『旧約』の戒律を否定する発言をしておられる。実はイエスは、『旧約』の中で神の戒律といわれているものをすべて「神から授かったもの」とは考えず、先人達が作ったものと考え、それらが不足・不完全であることからことごとく批判・否定していかれたと解釈することができ。先のハンムラビ「法典」が説く同害復讐（もしくは同害傷害）は、その誕生の主旨からして、決して悪いものではなく、むしろ弱者を守るためには必要な「判決」文であった。また『旧約』の場合も、「人に傷害を加えた者は、それと同一の傷害を受けねばならない」で始まっているから同主旨であり、この点に関しては、世俗的価値観からすれば、批判されなければならないほどのものではない。争いを裁く第三者の客観的で公平な視点に立つものであるからである。だがしかし『旧約』の場合、選民思想にもとづく異民族差別・攻撃が随所であり、神の命令による異民族皆殺しや財産横領もある。イエスはそれらを熟知していたため、世俗的価値観からすれ

ば必ずしも悪いものではない「目には目を、歯には歯を」という同害復讐をすらも否定し、それを宗教的価値観へと高めた結果、「悪人に手向かつてはならない」や「殴られても殴りかえしてはならない」という「報復禁止」や「怨恨をもたないことのすすめ」を説かれたものと筆者は推理する。その点で、イエスの教えはユダヤ系一神教から離れ、むしろ仏教に近似となる。ところで、『旧約』にも「隣人を愛せ」という普遍愛を説く神の言葉があると指摘する解説者は多い。確かにある。一部だけを引用してみる。

あなたは隣人を虐げてはならない。奪い取ってはならない。（「レビ記」一九・13）

あなたたちは不正な裁判をしてはならない。（「レビ記」一九・15）

心の中で兄弟を憎んではならない。（「レビ記」一九・17）

復讐してはならない。民の人々に恨みを抱いてはならない。（「レビ記」一九・18）

（「レビ記」一九・18）

自分自身を愛するように隣人を愛しなさい。わたしは主である。（「レビ記」一九・18）

解説者達は右の『旧約』の言葉を引用しながら、愛を説くイエスは『旧約』のこれらを引き継がれたものと指摘してきた。だがそれは誤った護教的解釈であろう。右の言葉は、ヤハウェ共同体のみに向かつていわれたことが一九章二節で明記されているし、他国の風習を嫌ったうえで、その異民族の土地を奪うことも視野に入れた上

での発言であることが、直後の次の文で明らかである。

あなたたちはわたしのすべての掟と法を忠実に守りなさい。そうすれば、わたしがあなたたちを住まわせるために導き入れる国から吐き出されることはない。あなたたちの前からわたしが追い払おうとしている国の風習に従ってはならない。彼らの行為はすべてわたしの嫌悪するものである。わたしはあなたたちに言う。あなたたちは彼らの土地を得るであろう。それは、乳と蜜の流れる土地である。私はあなたたちの神、主である。(「レビ記」二〇・22)

—24—

ヤハウエ神の命令に従うならば、乳と蜜の流れる土地を、その原住民から奪ってイスラエル人に与えると宣言する神の説く「愛」は、普遍愛ではあり得ない。イエスは、ヤハウエ神が説く愛が偏愛であると判断されていたことから、「山上の垂訓」で次の言葉を言われたと筆者は解釈する。

あなたがたも聞いておるとおり、「隣人を愛し、敵を憎め」と命じられている。しかし私は言っておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。あなたがたの天の父の子となるためである。父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである。自分を愛してくれる人を愛したところで、あなたがたにどんな報いがあるのか。徴

税人でも、同じことをしているではないか。自分の兄弟にだけ挨拶したところで、どんな優れたことをしたことになるか。異邦人でさえ、同じことをしているではないか。だから、あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい。(「マタイ伝五・43—48」)

イエスが批判しておられる『旧約』の「隣人を愛し、敵を憎め」の姿勢が、実はヤハウエ神の姿勢であることは先に述べた。その姿勢を批判し

敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。あなたがたの天の父の子となるためである。父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである。

といわれた時、イエスの「天の父」はヤハウエ神とは全く異なる神であることは歴然としている。だが、それを公言した瞬間、イエスはヤハウエ共同体では「邪魔者」「処刑されるべき者」となることも事実である。ところがキリスト教は二千年間、二つの宗教の神は同一神であるとしてきたのである。歴代のローマ教皇のなかには強面の教皇がいて、大きな誤ちを犯したのは、ヤハウエ神がキリスト教の神であると錯覚していたため、ヤハウエ神の強面を反映することは「神の義」に適うと思っただけなのではないのか。

イエスの説く「愛」が、『旧約』に頻繁に出てくる「愛」、とりわけ「レビ記」に多く出てくる「隣人愛」を受けついでたものであると、多くの神学者・神父・牧師がこれまで説いてきたが、それは誤解であろう。イスラエル人同士に限定された隣人愛は偏愛であり、その偏愛をイエスは「異邦人でさえ、同じことをしているではないか」という言葉で否定されたと解釈すべきであろう。そして個々人が「復讐」という私情を超えて普遍愛を持つようすすめるべく、

父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださる。(普遍愛)

あなたがたも聞いているとおり、「目には目を、歯には歯を」と命じられている。しかし、わたしは言っておく。悪人に手向かってはならない。(報復の禁止)

という、「普遍愛」と「報復禁止」を説かれたと考えるべきであろう。そしてその延長線上に、逃げる事ができないはずがないにも拘らず、十字架にかかってまで信念を貫く姿勢が採られたといえる。敢えて十字架にかかられた意義は、従来いわれてきたような「人類の罪を贖うため」であったのではなく、ユダヤ教の教義とは正反対の「普遍愛」と「報復禁止」を身をもって示すべく、絶体絶命の場にあつてなお貫ぬかれたことである。その意味では、内村鑑三氏が贖罪という教義を「奇態」といわれた勇氣ある発言は適正であった。十字架刑によって人類の罪が贖われる(＝帳消しになる)

はずがないことは、二千年間の歴史を見れば明白である。人類の罪はより凶悪となり、数もふえているからである。

そして「復活」の意義は、イエスが、ヤハウェ神が一方的に「命令する」同士愛・民族愛という偏愛ではなく、「聖霊なるロゴスの神(＝父なる神)」の普遍愛にめざめることを説くキリスト教の始祖として蘇がえられたことであると筆者は捉える。「復活」をこのように解釈すれば、イエスが十字架上で絶命したにも拘らず三日後に蘇生されたのか、あるいは絶命はせず瀕死の状態から癒えて七十六歳まで生存された(バーバラ・スリーリング教授が『死海文書』から解読された説)のか、をめぐっての永久に決着しそうにない空しい論争に執着する必要がなくなるのである。

第七章 「神の義」と「人間の理性」のいずれが

優先されるべきか

筆者はこの小論を「神の義か人間の理性か」と題している。さしたる実害を伴うことなく人々の心のよりどころや慰藉となっている信仰の場合はさておき、大宗教の場合は社会に与える影響が大きいだけに、教義に時代錯誤性がある場合、今後は人類を破局へと追い込む事態もあり得ることが、二十一世紀初年の9・11事件によって証明されている。

狂気に奔って暴挙をおこす者は、例えばバキスタンのイスラム神学校「マドラッサ」で『コーラン』だけを学んでいて、それ以外の

知識が絶無に近いと報道されたタリバンだけでなく、最先端の科学技術を学んだ人達の中にもいることは、アルカイダの秀才アタ等の事件が証明している。では彼らを等しく狂気へと奔らせるものは何か。イスラムにおけるテロの歴史を概観してみよう。

第一次中東戦争(48年)でアラブ諸国が大敗し、ユダヤ人シオニストに「イスラエル国家樹立宣言」をさせてしまったが、そのわずか十一分後には、アメリカ大統領トルーマンはアメリカ自身の国連代表にすら連絡することなく、「宣言承認」を発表している。この事件を機に、アメリカが常にイスラエル寄りの政策をとっているという思いがイスラム諸国につのつていき、そこからユダヤ人やアメリカ人に対するイスラム諸国の嫌悪がつのつていき、「イスラム原点回帰」志向が始まったとみられている。

初めはエジプトの「ムスリム同胞団」から運動が始まったが、それはモスクや学校の建設・貧民や孤児の救済などを通して、イスラム社会の結束を強化する地道な活動を目標とするものであった。だが七十年代に入ると、その穏健な活動にあきたらず分離していった過激派の「ジハード団」や「イスラム集団」などは、強固なイスラム体制を実現するには、当時宗教弾圧を行っていた政権を打倒しなければならぬという発想をもつようになった。その結果として、イスラエルとの和平を推進していったサダト大統領を暗殺(81年)するなどの反体制テロを繰り返すようになったのであり、その延長線上にあるとみられるのがタリバンやアルカイダのテロ事件であると推理されている。

右の史実は、政治紛争の決着をテロでつけるに際し、宗教が用いられていることを示している。宗教が、人心をテロという「狂気」へと奔らせるエネルギー源になっている側面があるということである。では、仏教では皆無に近いテロが、ユダヤ系一神教の場合頻繁にみられるのは何故か。その原因の一つとして「神の義」をあげるのではないかという推理を先に述べたが、その点を更に追求してみよう。

「神の義」という言葉に接すると、無信仰の者ですら「絶対的正しさ」を感じ易いし、信仰者なら「畏怖」と同時に「絶対服従志向」を覚え易い。だがユダヤ系一神教の「神の義」とは、「神からみた義しさ」のことであって、「人間の理性からみた正しさ」のことではない。ここで信仰者は、「人間の理性からみた正しさ」では信用するに足りないからこそ、「神からみた義しさ」が必要となるのだと主張するのが常である。もしその神が、天地を創造した唯一の絶対神であることが不動の事実であるならば、その「義」は「絶対的義しさ」といえるかもしれない。従来、ユダヤ教の神は天地創造の唯一絶対神であるといわれ、それがキリスト教やイスラムにもひきつがれてきたのであるが、次にそれが事実であるかフィクショナルにすぎないかを検証してみよう。これは学問上の必要性から生じた検証であることをご承知いただきたい。

ユダヤ教の場合、神の命令は「人間の理性」にとつて理不尽に見えるものでも、それを遵守・遂行することが「義」とされていて、そのため数千年間信者は守りつづけてきたわけである。そこに、信

者を結束させるユダヤ教の強さをみる人もいるが、逆に、異民族に通用しない戒律が少なくないことから、異民族には適用しない民族宗教であると分類されてきたわけである。この時点で、天地創造神は、ユダヤ教徒にしか適用しない戒律を与えたヤハウエ神とは異なる神であるという見方が可能となる。その場合、人間に「義」「不義」の判定をくだす神は、ヤハウエ神でこそあれ、天地創造神ではないことになろう。では次に、「人間の理性」にとつて理不尽にみえる「神の義」の由来を検証してみよう。

イスラエル人の始祖アブラハムは百歳になってようやく、妻サラとの間に息子イサクを授かるが、神は彼の忠誠心を試すべく、イサクを「焼き尽くす献げ物」とするよう命じる。彼は神の命令に従い、イサクを屠ろうとする。その時、天から主の御使いが次のように言う。

その子に手を下すな。何もしてはならない。あなたが神を畏れる者であることが、今、分かったからだ。(中略)
わたしは自らにかけて誓う、と主は言われる。あなたがこの事を行ひ、自分の独り子である息子すら惜しまなかつたので、あなたを豊かにし、あなたの子孫を天の星のように、海辺の砂のように増やそう。あなたの子孫は敵の城門を勝ち取る。地上の諸国民はすべて、あなたの子孫によって祝福を得る。あなたがわたしの声に聞き従つたからである。(創世記二二・12―18)

「人間の理性」からすれば「息子殺し」は反理性の悪である。だが神の命令なら「息子殺し」をいとわないほど神を畏れることが「神の義」に適うこととされる。詮じつめれば、神の試練は、アブラハムが「神の義」と「人間の理性」のいずれを選ぶかを試すことであつた。アブラハムは「人間の理性」より「神の義」を選んで息子を殺そうとしたが故に神は彼を祝福し、子孫をふやすことと、敵の城門を子孫に勝ち取らせることの二点を約束したのである。ここで、次の四点が結論として導かれる。

- ①この神は、敵の城門をアブラハムの子孫に勝ち取らせることを誓う神であるから、民族守護神でありこそすれ、全人類の守護神ではあり得ない。
- ②たとえ、神に対する服従心を試すためであれ、アブラハムに「息子殺し」を要求し、アブラハムがそれに応えたということが、殺人が「神の義」に適うとするテロ行為を正当化することに通じる。それが、その宗教共同体内の合意であるなら、その共同体内では通用しようが、「人間の理性」によって判断され機能している他の共同体内には通用しない。
- ③宇宙に根元の神が実在するとすれば、「人間の理性」の元ともいえる「宇宙理性」の具現者であるはずであり、従つて「人間の理性」の放棄を要求することや、「人間の理性」と矛盾することを要求することは考えにくい。「人間の理性」は「宇宙理性」から由来すると考えられるからである。例えば、仏教の

「転識得智」の「智」が、宇宙の根元の智であればこそ人間の智にもなり得るように、「宇宙理性」が「人間の理性」になり得ると考えられるからである。

④全人類が従うに値する神が実在するとすれば、「人間の理性」の放棄ではなく、その強化補完を資する神であろう。その意味でも、二十一世紀の宗教界で最重要な課題は、数千年前に作られた民族宗教にもとづく神概念に執着するのではなく、国際・宗際・学際の間から、「神」の至上の概念を求めていくことであろう。世界共通の「知の枠組み」を構築しなければ、宗教色の濃い民族紛争や連鎖する「報復」が消えることはない。

古代においては、各民族は、多分に民族エゴ意識をからませたイマジネーションによって神話を作り、ひいてはそれにもとづく信仰共同体を型成していった。それらは、仮に今なお魅惑的側面や、人々の心の慰藉となり得る側面をもつていようと、当民族に限られることから生じる非普遍的側面や排他的側面を多分に持つ。実はユダヤ教もそのような民族宗教の一つであり、その典型例が、「神の義」という大義名分をかかげて「人間の理性」を放棄し、周辺の異民族を皆殺しにして財産を横領したヨシユアであったわけである。

ところで古代キリスト教、少くともカトリックの人々は、自分はユダヤ人ではないにもかかわらず、ユダヤ教の神を「天地創造の唯一絶対神」とし、自宗教の神として受け入れてきた。それは、パウロがキリスト教に改宗した後でも、ユダヤ教の神がキリスト教の神

と同一の神であると独断(ロマ書三・29にしるされている)し、しかも彼の書簡が第一聖典とされる『新約』の中に収められていることに由来するといえよう。キリスト教徒が『新約』を批判・否定することは、基本的に出来ないからである。またムスリムも、ユダヤ教の神を「アッラー」(神、の意)と呼んで自宗教の神とし、またその神に忠実であったアブラハムを、神に対する彼の深い信仰心のゆえに、ムスリムの始祖として尊崇してきている。

日本人の多くは、イスラムの創唱者はムハンマドであって、アブラハムはイスラムとは無関係の人物であると思いつているが、全くの誤解である。アブラハムは神から「啓示の書」こそ授けられたが、モーゼより古い預言者であるし、彼こそ「真の宗教の信徒」(『ハニーフ』)のムスリムであったというのが、イスラムの説くところである。歴史上では、イスラムは西暦六百年にムハンマドによって創唱されたことになってはいるが、『コーラン』に記されている内容からすれば、イスラムは天地創造前から存在している、ムハンマドはそれを再確認したまでのことであるというのである。

しかも、ムハンマドが説いた内容は、アブラハムの宗教の復活であるから、アブラハムはムハンマドの先達であることになる。そしてムハンマドに授けられた『コーラン』は、それに先立つ啓示の書『モーゼ五書』や『新約聖書』などの誤りを改訂したものであるともいえるのである。

以上のことから、ユダヤ系一神教では、「神の義」が「人間の理

性」に優先され、二つが対峙する状況下では後者が否定されることになる。「人間の理性」からすれば「狂」にほかならないアブラハムの「息子殺し」（未遂ではあるが）が「神の義」に適うこととして正当化され尊崇されるのは、ユダヤ系一神教の基本的価値観であり、原理主義はその価値観に立っているわけである。そして、アタ等原理主義者の暴挙が「神の義」という価値観に基づいていたことは、アタがドイツの友人に語ったといわれる。

戦争は否定的なものとは限らない。イスラムのためなら正当化もされるんだ。イスラムのためなら、ぼくは自分の命をささげて戦ってもいい。（朝日新聞二〇〇二年一月三日朝刊四画）

という言葉が証明している。イスラムが天地創造以前から存在していると考えられるため、それを絶対視し全てに優先させることとなり、その結果イスラムのためなら「戦争が正当化される」という発想となり「聖戦」（＝ジハード）という概念が生まれる。それは「神の義」のためなら息子イサクを奢ることをもいとわぬアブラハムの発想や、キリスト教宣揚のため二百年にわたってイスラム攻撃のため十字軍を派遣しつづけたカトリックの発想などと根が同じであろう。自己を絶対化し、自己と対立するものへの排斥・否定が正当化される発想は、複数の神の共存を認めないヤハウエ神の発想で、それがユダヤ系一神教の三つの宗教に流れているのだが、それなら何故同一神を信奉する三宗教は骨肉の争いを続けているのか。また

「十戒」の第六で「殺すなかれ」と命じ、重い刑罰を用意している神が、何故その争いに適正な反応を示さないのか。この点に關し、アーノルド・トインビー氏の言葉が深い示唆を与えているように思われる。

貧欲を動機として技術が生み出した諸々の結果から人類を救うには、私は、あらゆる宗教、哲学の信奉者たちによる世界的な協力が、必要だと信じています。また、そこではヒンズー教徒、仏教徒、それに神道信徒がイニシアチブをとることを望みます。

ユダヤ系宗教の信徒たちは、その排他性、不寛容性という身動きのとれない伝統によってハンディキャップを負っています。これは、一神教であることからくる報いの一つです。これに対して、ヒンズー教徒や東アジア諸国民の間では、互いに異なる宗教の信者同士が包容し合い、尊敬し合うという伝統があります。日本でも、仏教徒と神道信者の間に積極的な協力がみられました。これこそ、貧欲という根を断ち切って汚染を取り除く、協調的な世界的努力に必要とされる実践であり、精神です。（二十一世紀への対話―七八―七九頁）

キリスト教国である英国の、二十世紀最大の歴史学者といわれた氏の言葉に、我田引水の気配はない。真実を言い当てている印象と、混乱に対する解決の糸口を提供している気配が感じられもする。氏の言葉を整理すると次のようになる。

④ユダヤ系宗教の信徒達は、排他性と不寛容性という身動きの出来ない伝統によってハンデイキャップを負っている。

⑤それは一神教であることからくる報い(結果)である。

⑥ただし、一神教であることが悪いという意味ではなく、そこにある貧欲が悪であるということが文脈から分かる。(これは、ユダヤ系宗教の出発点が、民族エゴを多分に含んだ「神の義」の上に成立していることを指しているように思われる。)

⑦それらを打開するには、あらゆる宗教や哲学の信奉者たちによる世界的な協力が必要である。(これは、国際・宗際・学際の間から、現代に見合った新しい宗教観や神学の誕生の必要性を望むことを意味しているように思われる。)

⑧その場合、ヒンズー教徒・仏教徒・神道信徒がイニシアチブをとることが望ましい。(この発想は、ヒンズー教・仏教・神道が万物に神性を認め、エゴ意識が少なく、従って互いに争い合うことが極端に少ないことから生まれているように思われる。)

次にトインビー氏がユダヤ系一神教を批判される論拠を具体的に追ってみよう。引用してみる。

ユダヤ系の諸宗教は、宇宙に内在する神的な要素を、すべて超宇宙の唯一無二、全能の創造神に集約させています。そして、こうした神性の限定が、自然から——人間性をも含めた自然から——その神聖さを奪い去ってしまったのです。これに対して、近代西欧

の衝撃を受ける以前のインドや東アジアにあつては、全宇宙も、そこに含まれるあらゆるものも——人間以外の自然も人間自身もすべてひっくりかえり、神性をもっており、したがって、人間からみれば神聖さと尊厳さをもっていると考えられてきました。これが、人間以外の自然に暴威をふるって自己の欲望を満たそうとする、人間の衝動を抑えてきたのでした。(『二十一世紀への対話』一四〇頁)

つまり、ユダヤ系諸宗教においては、人間や自然は神聖とはされず、超宇宙の唯一無二なる全能の創造神のみが神聖であるというのである。それに対して近代西欧の影響を受ける以前のインドや東アジアの場合は、自然も人間も動植物も含めた自然界全体が神性をもっていると感じられていたため、欲望を満たすべく自然破壊をすることがなかったというのである。ここでは、神性は宇宙に内在し、宇宙に遍満しているもので、人間の観点は汎神教的なものであったという。そして実は、この汎神的観点は、キリスト教やイスラムに改宗する以前の旧世界西端部やアメリカ両大陸のみならず、中米文化、ペルー文化、シュメール文化、ギリシャ・ローマ文化、エジプト文化、さらに一神教に転じる以前のイスラエル人のカナン文化でも共通していたというのである。つまり、ユダヤ教が誕生する以前は世界中のどの地域でも、宗教は汎神教であつて、一神教ではなかったという指摘である。

次の論点として、自然の中に神性を見ることをしないユダヤ系一

神教には自然崇拜欠如があり、むしろ「人間以外の自然を意のままに利用してよい特権を神から授かっている」（同書一四三頁）とする教説があるために、産業革命と共に「無生の自然力に含まれる無限に巨大な物理的力を人間が大々的に利用し始め」、自然に対する「人間の威圧力は、事実上、まさに限りないものとなった」（同書一四三頁）と指摘されている。

さらに「一七世紀において、近代西欧人が古来のキリスト教に代わるものとして脱キリスト教的科学信仰を選んださい、有神論は捨て去りながらも、人間以外の自然を利用する権利への信仰だけは、一神教から抽出して、そのまま保ち続けた」（同書一四四頁）のであるが、この「近代西欧に起源するこれらの脱キリスト教的な宗教（科学のこと）こそが、人類を今日の窮状へと追い込んだもの」（同書一四四頁）であるという批判もなされている。つまり、近代科学はキリスト教をはなれた地点から出発しながらも、自然に対する支配的態度だけはキリスト教から引きついでいて、そのため人類を今日の窮状に追いこんでいるというのである。ではその窮状から回復するにはどうしたらよいのか。氏のビジョンは次の言葉に要約される。

私は、人類はいま再び汎神教へと回帰する必要があると信じています。われわれは、人間以外の自然がもつ尊厳性に対して、元来もっていた尊敬と配慮の念を取り戻す必要があります。そして、そのためには、われわれがそうするのを助けてくれる、正しい宗

教ともいうべきものが重要です。この正しい宗教とは、人間も人間以外をも含む自然全体がもつ尊厳性と神聖さに対して、崇敬の念をもつべきことを教えてくれる宗教のことです。（同書一四六頁）

トインビー氏の言葉には「正しい宗教」という句がでてくる。それは「正しくない宗教」もあることを示唆しているため、「信教の自由」を謳歌する人々の反発を買う確率が高い。しかし、信仰には、正信・迷信・妄信・邪信などがあることを直視すれば、やはり宗教にも「正」「不正」があることは否定できない。いや、本来の「宗教」の意味からすれば、正しい信仰のみが宗教であり、迷信・妄信・邪信は「宗教」とは言えないことは先に詳述済みである。ここでトインビー氏の言葉を要約すると次のようになる。

- ① 人類は再び汎神教へと回帰する必要がある。
- ② 自然がもつ尊厳性に対して人間が元来持っていた尊敬と配慮を取り戻すためである。
- ③ それには、正しい宗教が必要である。
- ④ 正しい宗教とは、宇宙（人間・動物・植物を含めた自然全体のこと）の尊厳性と神聖さに崇敬の念をもつことを教えてくれる宗教のことである。

人類は再び汎神教に回帰する必要があるという指摘は、数千年間自身の絶対優位性を信じ誇りにしてきた側面のあるユダヤ系一神教

の三宗教にとっては、決して快よいものではないだろう。一神教の誕生によってこそ、人類は初めて真に文明人らしい高度で高貴な宗教に至り得たと信じるのが一神教徒の平均的な感覚であったからである。それは、とりわりキリスト教徒に強く流れる感覚であり、そのため「野蛮人」「未開人」を教化回宗させるという意識から世界各地へと布教に赴くという歴史を歩んできたのもあった。だがトインビー氏は、一神教が神性や神聖さを神に対してのみ認め、それ以外の一切に対しては認めないことが道理に合わないし、人間は人間以外の全てを支配する権限を神から与えられたという錯覚から自然破壊を犯してきたのであるから、一神教ではどうにもならなくなっている指摘されているのである。それを更に敷衍すれば、先に筆者が述べたように、「人間の理性」よりも「神の義」を選んで、「息子殺し」「異民族皆殺し」「異民族財産横領」を正当化することの不正さの指摘もなされなければならない。この点で、トインビー氏の懊悩にみちた指摘は正しいといえよう。

ところで、氏が言われる「正しい宗教」とは、宇宙全体が神性をもち、神聖で尊厳であることを教えてくれる宗教である。氏は「正しい宗教」を「高等宗教」とも表現したうえで、「私が高等宗教というとき、その意味は、人間各自を『究極の精神的実在』に直接触れ合わせる宗教ということです。」（同書一五〇頁）と定義した上で、「このように定義づけられる高等宗教こそ、現代人が必要としているものです。」（同書一五〇頁）と結論づけておられる。氏が理想とする高等宗教では、『究極の精神的実在』は神人同形の「人格神本位」

の形をとるのではなく、「法本位」の形をとることが明示されている。キリスト教でいうなら、神よりはロゴスが優先されるというべきであろう。

有神論宗教の場合、『究極の精神的実在』は人間に似た存在として捉えられている。ギリシャ、ヒンズー、スカンジナビアの神々は身体面すら人間に似ているし、ユダヤ系一神教で受け入れられているヤハウェ神は嫉妬や憤怒などの人間的な感情をもち、その行動はそのような感情に左右されることも『旧約』にはつぶさに描かれている。氏の「ヤハウェの行いには、人間であったならば当然とがめられ、叱責をこうむるようなところがあったと思われるわけです。」（同書一五一頁）という指摘を否定できる者はありません。古代人が宇宙の偉大なる働きをイメージするときの稚拙な想像が、神人同形の神の誕生につながったことは想像に難くない。それについてトインビー氏は次のように言われる。

『究極の精神的実在』を神人同形のものとして描き出すことによつて、そうした願望を満たそうとするのは、やはり不合理なことです。『究極の実在』が人間的なものであるという根拠はまったくありません。いや、人間に似ているなどとはまず考えられもしないことです。なぜなら、人間は、自然を構成している森羅万象のなかの、ほんの一部にしかすぎない存在だからです。

このように考えると、私も、ゼウス、アテナ、アポロンといった万神殿パルテノンの神々や、ヤハウェのような唯一神よりも、仏教で説か

れる普遍的な生命の法体系のほうが、究極の精神実在^をを、より誤りなく示し出しているように思います。(同書一五二頁)

氏は、神が神人同形の人格神として解釈されることが不自然であると指摘されているのである。氏は、現代に必要な宗教は、「神本位の宗教」ではなく「法本位の宗教」であるともいわれるのである。氏の立場は、信仰者のそれではなく、宗教界の現状を憂いる一学究者のそれである。信仰者にとっては、自分の信仰する宗教が、たとえ氏によって批判される人格神を立てる宗教であろうと、「それしかない」というほど貴重で不可欠なものであるはずであり、従って猛反論がなされる確率が高い。自分の信仰対象が批判・否定されることは、自身の全人格を批判・否定されることに等しいこととして感受されるのが常であるからである。

しかし、その存在も絶対性をも客観的に証明することが不可能な人格神を立て、その神の「義」を選んで「人間の理性」を捨てたとき、「息子殺し」「異民族皆殺し」「異民族財産横領」が実践されたわけである。また、「自然界には神性はない」という前提に立ち、従って人間が自然を思いのままに支配する権利を神から与えられているという教義があつたればこそ、科学技術の進展のままに、人間の利益だけのために自然を破壊しつづけ、今その代償を払わされている近代以後の歴史もある。そればかりか、自分が信仰する唯一神を信じない者は人間ではなく、従って殺すことも奴隷にすることも自由であるとし、七つの海を支配し世界各国を植民地としていった

「近代法」時代の歴史もある。

さらに、『旧約』の神の命令通りに、数十万・数百万ともいわれる女性を「魔女」として殺害し、その財産を没収した歴史もある。

話はそれだけではない。事もあるうに、同一神を信奉するはずのユダヤ系一神教同士間での抗争——カトリックとオーソドックス、カトリックとプロテスタント、複数のプロテスタント教派間、ユダヤ教とキリスト教、ユダヤ教とイスラム、キリスト教とイスラム、イスラム教派間、などの抗争——もある。

二十一世紀は、一般信者はともかく、宗教学者や指導者が一同に会し、宗教のあり方についての共通分母となり得る普遍的な「知の枠組」を構築することは必須の急務であろう。特に害がなく、排他性や独善性をもつわけでもない民間信仰の場合はともかく、世界に伝播している大宗教の場合、互いに敬愛し得る教義が確立していなければならぬ世紀であるというべきであろう。教義次第で、信仰が正信・迷信・邪信・妄信へと分岐していき、迷信・邪信・妄信の場合には世界は9・11事件にも似た事件へと再び巻き込まれる危険性をはらむからである。

第八章 仏教における課題

トインビー氏は、ヒンズー教・仏教・神道の信徒達がイニシアチブをとることを望んでおられたが、これら三宗教が完全無欠の宗教であることを意味しているわけではあるまい。これらのいずれに

も、優れた側面があると同時に、末梢の部分では本来の意味や意義からはずれている側面もある。例えばヒンズー教のもつカースト制度・特定の動物神聖視・寡婦焚死などが世界から支持される価値観であるとは思えないし、神道がナシヨナリズムと結びついた時生じた閉鎖性や排他性も世界から評価されてはいない。では仏教はどうか。仏教の場合、仏の認識を誤まれば、偶像崇拜に陥ってしまう。その点を明晰にすることが、今後の仏教界最大の課題であろう。

阿弥陀如来・薬師如来・観世音菩薩・地藏菩薩などへの信仰は広くおこなわれてきているが、それらと信仰者自身との関係を本来の仏教哲理の見地において整合性あるものとして捉えなければ、仏教というよりは、土俗民間信仰的偶像崇拜に陥る。

ユダヤ系一神教の場合、神は一大前提であり、法や戒律はその神が与えたとする「神前法(戒)後」という構造をもつ。一方の仏教の場合、さまざまな名称をもつ諸仏は、実は方便である。仏教は、仏より先に「法」があり、諸仏は「法」が人格化された「法前仏後」の構造をもつ。「法を以て第一義となす」といわれるゆえんである。

浄土門の場合、阿弥陀如来は「尽十方無碍光如来」という名称をも持つので、あたかもユダヤ系一神教の唯一神にも似た存在者であるかのようなイメージを信仰者は持ち易いが、実は「方便法身」なのである。「法身」が方便として、あのような本願とお姿をとられたものなのである。「無量寿経」には、阿弥陀如来誕生の説話が説

かれていた。過去の久遠劫に、世自在王仏がましました時、或る国王が発心をし、王位を捨てて法蔵比丘となり、世自在王仏のもとで修行し、諸仏の浄土を見学し、五劫の間考え、四十八願をおこして徳を積んだため、今から十劫以前にその願行が成就して阿弥陀如来となられ、西方十万億土に極楽を建立し、今も説法をしておられるというのである。その立てた誓願の報いがみのつたため「報身仏」といわれてもいる。

しかし、右の説話を歴史的事実と受けとめる人は今日絶無に近いだろう。それなら、誓願の報いがみのつたために「報身仏」といわれるという論理も成立しにくい。実は、阿弥陀如来は、もともと「法身」であられ、それが方便としてあの四十八願という誓願をもつて現われてくださった「方便法身」であられると考えるのが哲学的整合性のある解釈であろう。四十八願の誓願をたててくださった「報い」として、方便法身としての阿弥陀如来が誕生されたと考えるべきであろう。

宇宙が「法」(dharma)に基づいて運行し、仏教哲理でいう「無常」も「因果律」もこの「法」ゆえの現象であるというのが、仏教の基本中の基本視点である。この「法」は、「六大」(＝地大・水大・火大・風大・空大・識大)を通して現象界へと作動している。その「法」の偉大さを何かに喩えようとする傾向が人間にはあり、その場合視角にうつつたえるものに喩えがちである。「法」を「身体」あるものに喩えようとしたとき「法身」(dharma kāya)という言葉が生まれた。さらに、万物を照らし生かすその特性を「光かがや

くもの」(vairocana)とイメージして言語化した。それを中国語で音訳したとき「毘盧遮那」となったわけである。「光りかがやくもの」の一つに太陽があるが、太陽は夜や洞窟を照らすことができないう相対的なものであることから、それより偉大であることを示す必要上、「大」(Maha)をつけ、Mahāvairocanaという句が生まれた。それを音訳すれば「大毘盧遮那」となり、意識したとき「大日」となった。なお「大日」は「六大」と等しいことから「六大法身」という句が生まれたが、「六大」は『中阿含第三度経』の中では

云何が六界の法なる、(中略)謂わく地界水火風空識界なり。是れを六界の法と謂ふ。

として登場するし、『俱舍論』第一には

彼の経中に説く所の六界は、地水火風の四界は已に説く、空識の二界は未だ其の相を説かず。

として登場している。仏教には多数の仏が登場し、しかも宗派によって立てる仏が異なるので、一般人は混乱する傾向があるが、根本仏は「法身」であり、それが喩えられた別名が「大日」や「毘盧遮那」である。ここでは意識の「大日」を採り、更に「六大法身」という概念を採ることにする。

「六大」が「法身」であり、「法身」が「大日」であるという一大

前提がまずある。一方、万物が「六大」の現象化したものであることは不動の事実である。とすれば、万物が「法身」であり、「大日」であることは、等式が導く不動の哲理でもある。実はこれは密教が説く哲理であり、般若心経の中にも内蔵されているのである(詳細は拙著『般若心経の真髓を採る』第四章に記述)。

すると、仏教徒が信仰の対象としている諸仏は、法身がさまざまな本誓(＝本願)をもって方便としての姿をとって現われたものということになり、従って諸仏は人間の外部に実在する存在ではなく、人間に内在する「願い」が人格として対象化されたものであることが見えてくる。阿弥陀仏も薬師仏も観音菩薩も地藏菩薩も外在仏ではなく、内在仏であることが見えてくる。

つまり、我々には汚れた身口意の三業と、絶対清浄の身口意たる三密が共存し、逆対応的に位置していて、両者は決定的に矛盾するものである。しかし、汚れた三業が、清浄なる三密を憧憬し合掌して近づく心をもっていることも事実である。そして、近づいて両者が一つになった状況を仏教では「入我我入」といい、西田哲学では「絶対矛盾的自己同一」というのである。

しかし我々は一般に、仏像に対面するとき、右のことを知らず、あたかも偶像崇拜にも近い心をもって礼拝する傾向がある。一方、ユダヤ系一神教徒達は右の仏教哲理の真意を知らないために、仏教の祈りを全面的に偶像崇拜と断定し否定するのだが、仏教徒側にも本来の意味・意義を知らないために「偶像崇拜」に陥っている側面があることは否定できない。

信仰者には「それしかない」という視野狭窄的側面が生まれ易く、結果として「蟻地獄」にも似た状況に陥ることもあるが、自身はそれに気付かず「信教の自由の保障」を盾に逆襲に転じるケースがしばしばある。宗教戦争の多くにはそのような側面があろう。二十一世紀初年の9・11事件を機に、せめて世界宗教レベルの宗教教団の指導者・学者は、宗教と俗信の違いを明確にし、それぞれの教義の根本的見直しをしなければならないのではないかと。

第九章 キリスト教は「言前神後」の宗教である

ところで、キリスト教は従来ユダヤ系一神教の一つといわれ、従ってユダヤ教の神と同一の神を信奉する「神前法後」の宗教であるとされてきた。だが筆者の見方は全く異なる。イエスが「神への冒瀆は赦されるが、聖霊への冒瀆は赦されない」と言われたことと、ヨハネ伝冒頭の「初めに言があった」という文言からして、「言」こそ宇宙の根元であり、その働きが「聖霊」であると筆者は捉え、「聖なる言」^{ロゴス}を人格化したものがイエスのいわゆる「父なる神」であり、従ってそれはユダヤ教の神とは異なると考える。

ヘーゲルは「超越とは、対象を否定しつつも温存する」といみじくも言った。イエスは、『旧約』の言葉を頻繁に引用されているという意味では『旧約』を温存しておられる側面はあるが、ヤハウェ神を根本的に超越・否定しておられる、というのが筆者の見方である。だからこそ、ユダヤ教徒の怒りを買う十字架にかけられたので

ある。『旧約』の神は外在神であり、その神だけが神聖とされ、人間も自然界も何一つ神聖視されてはいない。一方「聖なる言の神」は宇宙に遍満する内在神であり、従って人間にも自然界にも内在し、万物は神聖なる側面をもつこととなる。その意味で、仏教の「一切衆生悉有仏性、如来常住無有變易」(『涅槃經』師子吼菩薩品一)の発想とむしろ相似である。

だからこそ、ユダヤ教の場合、人が完全になることは不可能であるのに対して、イエスは人が完全になることが可能であると観ておられ

あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい。(マタイ伝五・48)

と言われたのであった。また、自然界が清浄でかつ完全であること(「栄華を極めたソロモンでさえ、この花(＝野の花)の一つほどにも着飾ってはいなかった」(マタイ伝六・29)という言葉で述べられ、さらに「空の鳥をよく見なさい。種も時かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。だが、あなたがたの天の父は鳥を養ってくださる」(マタイ伝六・26)という言葉で述べられたのであった。これらの自然賛美は『旧約』には全く見られないものである。

また、人間の内部に罪はなく、あるのはむしろ聖霊であるという、ユダヤ教にはない認識は次のパウロの言葉にみられ、それは仏教の場合、貪瞋痴は迷いから生じた一時的なもので、本来人間の内

部にあるものではないという発想と相似である。

人が犯す罪はすべて体の外にあります。(「コリントの信徒への手紙

一」六・18)

あなたがたの体は、神からいただいた聖霊が宿ってくださる神殿であり、あなたがたはもはや自分自身のものではないのです。

(「コリントの信徒への手紙一」六・19)

人間に宿るものが聖霊であればこそ、パウロは「あなたがたは、自分の体がキリストの体の一部だとは知らないのですか」(「コリントの信徒への手紙二」六・15)と言ひ、「だから、自分の体で神の栄光を現しなさい」(「コリントの信徒への手紙二」六・20)と言ひ得たのである。

キリスト教がこの点を適切に解釈していたならば、理不尽な要求をする強面の民族守護神に倣う暗黒の歴史を持つことなく、イエスの真意に適った歴史を持ち得たはずである。ともあれ、仏教の「法」とヨハネ伝の「言」こそ両宗教の基礎であり、これを基礎とした時、トインビー氏の心に適う二十一世紀に耐え得る普遍的なキリスト教哲理が構築される確率が高くなるし、それはイエスの真意に適う神学となると思われる。

第十章 イエスは唯一神を超えていた

右のようなキリスト教解釈を筆者はすでに長年持ちつづけてきたのだが、最近アメリカの宗教学者がほとんど同主旨の解釈をしておられることを知ったので、紹介させていただく。

ケン・ウィルバーは、宗教的意識を八段階に分類し、それらは対等のものではなく、順次に高度なものへと進化するものと考えた。第六段階は「サンボガカヤ(正覚)」であり、第七段階は「ダルマカヤ(法身)」であるとした。そして、仏陀や老子やイエスなど精神上の巨人はサンボガカヤの境地を脱しダルマカヤに達しているとし、次のように述べている。

サンボガカヤでは世界との一体感が感じられ、一つの神が見えるがゆえに魂をいけにえにささげて絶対的唯一者と交流をもとうとする。ダルマカヤではもはや唯一者と語り合ったり唯一者を礼拝しようとはしない。むしろ自らが唯一者と同化する。(中略)サンボガカヤでは客体と主体の二元性や創造主と被造物、神と魂といった対立概念の名残がみられた。しかし、ダルマカヤでは客観と主観は大きく姿を変えて同一のものとなり創造主と被造物は不可分の一体となる。神と魂は融合して光り輝く空のなかに帰帰し、すべてを包含する全意識のなかにある。ダルマカヤの空は、オシリスやラーのいったように「われは神を作りしものと霊なり」と

いう表現があてはまる。サンボガカヤの声が「天にましますわれらの父よ」というのであれば、ダルマカヤは「われ父と共にあり」という声になる。(『エデンから―超意識への道』二二五―二二六頁)

『旧約』の一神教は「サンボガカヤ」レベルのものであるのに対し、イエスのいわれる神は一段階上の「ダルマカヤ」レベルのものであるというのが氏の論旨であるが、その点を更に引用しておく。

モーゼの一神教はサンボガカヤを忠実に反映している。神という存在は炎と光をとまなっており、個々人の運命に意味を与え、自己の鍛練と苦行の末に神と接触をもつことができる。しかし、その神はあくまでも「他者」であり続ける。創造主はすべての被造物から分離しており、神は世界や魂とは別のものである。神と深い交わりをもつことは可能だが神と一つになることはできない。

(中略)

キリストはサンボガカヤの世界にダルマカヤをもたらし、「私は父と一つである」とした。キリストが直面したのはモーゼの律法で定義された神つまり「外にひかえる唯一神」であった。キリストはこの思想を批判したために「お前は人間であるのに自分を神と称している」とされて十字架にかけられてしまった。キリストはサンボガカヤから一歩前進して、客体と主体、創造主と被造物という二元的世界を脱却し、神と魂が空のなかで統合する教えを

説き、そのため殺された。

(中略)

グノーシス派の文献には次のような指示がみられる。「神を探し天地創造の始まりを考えることを止めよ。まず自己を見よ。己れが何者かを悟るとき神を識る」。これらの文献からいえることは、イエス・キリストの布教の目的は単に自分が神の子となることではなく、すべての人間が神の子となるような手ほどこきをすることであった。(同書二二五―二二九頁)

ケン・ウィルバーによれば、イエスはユダヤ教が信奉する「外にひかえる唯一神」を超え、創造主と被造物という二元論を超え、「神を作りしものと霊」である空の中で、その魂は神と融合して光り輝き、全てを包含する全意識の中にあつて、「われ父と共にあり」という境地におられたことになる。そして、人間は誰でもその境地になり得るし、イエスはその手ほどこきをするために布教をされたというのである。それは、仏教の聖道門が説きつづけてきた道と同じであり、ケン・ウィルバーのイエス観は筆者のイエス観とほとんどその点で一致している。彼の「空」解釈もまた、筆者が「宇宙生命」や「仏の御命」と解釈している(拙著『般若心経の研究』や『般若心経の真髄を探る』の中に詳述済み)ものほとんど同じであるように思われる。

唯一神信仰はエジプトに誕生したことは知られている。紀元前三七二年〜五四年にかけての第一八王朝の王アメンホテップ三世の

継承者であるイクナトンの命令で、アトンという名称の太陽神である唯一神信仰が誕生した。一方、「モーゼ」という名前は元来エジプト人の名前であり、『旧約』に登場するモーゼもエジプトの貴族出身であることは定説である。そのモーゼが唯一神という概念をシナイ半島にもたらしたという学説は、フロイドからキャンベルに至るまでなされているとした上で、ケン・ウィルバーは次のように述べている。

シナイ山上でアトンの啓示が炎や光や天使、天からの声などなかで神の姿をとった。ところがいかなる理由によるものか、その地方にある火山の神ヤーベ（エホバ）の名前がアトンにつけられ、かくて西洋文明の神の姿と名前が定まった。（同書三七頁）

右の経緯が史実であるとしたら、『旧約』の中で「ヤハウエ」（＝エホバ）という名称が登場するのはモーゼの時代からであることと一致するし、モーゼ登場以前の『旧約』とりわけ「創世記」の「天地創造」の神はヤハウエ神とは関係がない神ということになる。「天地創造」物語は、クリストファー・ナイトとロバート・ロマスが言うように、バビロニアの叙事詩『エヌマ・エリシュ』の創世物語のコピーである確率が高く、従って筆者が主張しつづけてきたように、天地創造神とヤハウエ神は別神である確率はきわめて高くなる。

この論文は「神の義か人間の理性か」と題している。現代におい

て普遍的に通用する哲学をもつとは思えないヤハウエ神が与える「義」に従うことを、モーゼ等が民に要求したことは、民族を一致団結させるための方便としてであっただろう。それに気付かないまま浅はかに西洋文明に全面的に受け入れたことが、さまざまなひずみをもたらしてき、その結果二十一世紀の初年の9・11事件をもたらしてしまっただけではないのか。

「人間の理性」は宇宙の「言」から生まれるものであり、従って一民族の守護神が定め要求する「義」より普遍性をもつものと考えられる。キリスト教は、イエスの真意を探り当てるなら、イエスの教えがユダヤ系一神教的なものではなく、むしろそれを批判したところに生じた「言前神後」の宗教であり、サンボガカヤを超えていて、むしろ仏教と同じダルマカヤの宗教であることに気付くはずである。イエスは、ユダヤ系一神教の唯一神信仰を超えていたのである。以上のことから、伝統的な西洋型キリスト教神学は、イエスのみを神格化することで人間学には変換し得ない方向にむかい、結果的にはイエスの教えとは違ってしまっただけではないかという思いを禁じ得ないのである。

(完)

参考文献

- 『聖書 新共同訳―旧約聖書統編つき』（財団法人日本聖書協会、一九八七年）
藤本勝次責任編集『ゴーラン』（中央公論社、一九九〇年七月一五日四版）
クリストファー・ナイト／ロバート・ロマス、松田和也訳『封印のイエス』

- (学習研究社、一九九八年一月二六日第二刷)
下中直也編『イスラム事典』(平凡社、一九八八年四月一日初版第七刷)
中田一郎『ハンムラビ「法典」』(リトン、一九九九年二月二〇日)
A・J・トインビー／池田大作『三十二世紀への対話1』(聖教新聞社、一九九七年七月三〇日第三〇刷)
A・J・トインビー／池田大作『三十二世紀への対話4』(聖教新聞社、一九九八年二月一日第二二刷)
ケン・ウィルバー、松尾式之訳『エデンから―超意識への道』(講談社、一九八六年四月二〇日第一刷)